

『禎子の千羽鶴』いかがでしたか。これから、おばあさんの子ども時代のお話をします。

アメリカのオバマ大統領が、安倍首相とともに広島市の平和公園で花輪を捧げ、原爆資料館を訪れた際に、折り鶴を4羽寄贈したことは、ニュースで報道され話題になりました。オバマ大統領が原爆資料館で最も興

味を持って眺めていた小さな鶴は、禎子さんが折ったものだそうです。

私と戦争との関わりは、小学校2年生の時からです。昭和12年7月、日中戦争が始まり、9月には父に赤紙(召集令状)が来て高崎連隊に入隊しました。その頃はまだ日本は勇ましく、軍人会館(現九段会館)に勤めていた父は盛大な見送りを受けまし

た。本家での見送りのも村中、総出。旗や幟で賑やかでした。訓練の後には中国大陸の中部地方に行っていたようです。父が戦地で戦っていた時、隣の人と話をしていたら急に黙ってしまい、どうしたのかと声をかけるとすでに亡くなっていたと、帰還した後

に話していました。  
昭和16年12月に太平洋戦争が始まり、最初のうちは「鬼畜米英やつつけろ」と勇ましいことを言って「南京陥落」「シンガポールも陥ちた」と軍に踊らされ、旗行列や提灯行列を繰り広げていました。ですが、次第にラジオから流れる「軍艦マーチ」も「海行かば」に変わり、空襲が激しくなってきました。

その頃は、阿佐谷に住んでいましたが、2、3日前に下町が空襲で壊滅状態にな

りました。次は山の手が危ないと思っていたその晩、ヴォーンと不気味な音がし、飛行機が目前に現れ、乗っているアメリカ兵の顔がハッキリ見え、機銃掃射に思わず母たちと庭にしゃがみ込みました。その時は、中島飛行機工場(現在は桃井原っぱ公園)がやられたそうです。家の近くでは杉並第一小学校の隣の屋敷林に爆弾が落とされ、大きな穴が開いていました。

戦況が険しくなり、中学生、女学生にも動員がかかり、武蔵境にある軍需工場で旋盤工としてネジを作っていました。その時の心安まる一番の思い出は、昼休みに担任の先生を囲み山本有三や芥川龍之介などを少しずつ読んでいただいたことです。

その頃のお弁当と言えば、麦のいっぽい入ったご飯に梅干しが一つ。所詮「日の丸弁当」です。又は、さつま芋が一本だけ。副菜など何もありませんでした。食糧難は今では考えられないほどの酷さでした。家の周りには結構空地があったので畑にしましたが、芋などは水っぽく上手に出来ませんでした。葉や茎さえも食べました。アカザ、タンポポ、ハコベなども大事な食糧でした。

戦後も食糧難はしばらく続きました。配給もありましたが、アメリカの放出品資の

粉ミルクやアンモニア臭のするホッケ等だけで、多くは自給自足を強いられました。叔父と一緒に千葉の知り合いにお米や、山梨の方へは炭の買出しにもよく行きました。今はお金でも何でも揃いますが、当時はお金ではだめで、母の大切な着物等との物々交換でした。

平和が訪れて今があります。亡くなった夫に旅行に連れて行ってあげると言われた時、真っ先に広島行を頼みました。原爆資料館を見学すると、何と惨いことが起きていたのかが身に沁みてわかります。

なぜこの地球上から戦争が無くならないのでしょうか。戦中・戦後を生き延びた者として、平和を望むことがどんなに大切かを、生きていく限り、声を大にして叫んでいきたいと思えます。



『禎子の千羽鶴』

佐々木雅弘／著 くまおり純／絵  
学研プラス

広島で原爆にあい、10年後に原爆症となった少女・佐々木禎子さん。12歳で亡くなるまで、周囲の人を思いやり、明るくふるまいながら千羽鶴を折り続けた禎子さんは「原爆の子の像」のモデルとなりました。実の兄がはじめて書いた禎子さんと家族の物語。(出版社HPより)

● 発行: 2013年7月12日  
● I S B N: 978-4-05-203817-4



読み聞かせを通じて子ども達とふれあう  
(左側が筆者)